

# クシャーン朝三都の仏教美術

## マトゥラーとカピサの関係をめぐって

前田たつひこ 特別研究員・平山郁夫シルクロード美術館学芸部長

1. マトゥラー調査の目的
2. 仏陀・菩薩立像脚間の表現
  - a. マトゥラー
  - b. ガンダーラ
  - c. カピサ
  - d. ガンダーラ北接地域
3. 光背の表現
  - a. マトゥラー
  - b. ガンダーラ
  - c. カピサ
  - d. ガンダーラ北接地域
4. 三尊形式
5. 奉献者の表現
6. 千輻輪
7. まとめ

### はじめに

昨年度の調査はクシャーン朝の美術とポスト・クシャーン期の美術に関わるものに絞った。クシャーン朝は西暦1～3世紀頃ガンダーラを中心に北はウズベキスタン南部から南はインドのガンガー流域にまで覇権を広げたイラン系遊牧民王朝で、この王朝のもと、仏教美術の大輪の花がいくつも花開いた。帝国の冬の都で王朝の神殿（デーヴァクラ）があったインドのマトゥラー、春と秋の宮廷であったと思われるプルシャブラ（現ベシャーワル）を中心とするガンダーラ、夏の宮殿所在地で、7世紀になってもカニシュカ王伝説が語り継がれていたカピサ<sup>(1)</sup>、この3つの都（地図参照）それぞれに独自の仏教美術が展開された。なかでも仏像の誕生、すなわち仏陀をはじめて人の姿で表すという仏教美術界に大きな変革をもたらし、その後の東方への展開

(1) 玄奘『大唐西域記』巻138



概略地図（イメージ文化科学学生・井上明日香作成）

に多大な影響を及ぼした仏教美術史上もっとも重要な出来事を創出したのもこのクシャーン王朝である。カピサ（アフガニスタン中部、首都カーブルの北）はいまだ入国踏査が難しく、ガンダーラは幾度か訪問していることから、今回の調査は、マトゥラーに焦点をあてた。これまでも訪れてはいたが、それはおもにカニシュカをはじめとする王侯像や太陽神スーリヤ像、さらに当地で発見されたガンダーラ作品に主眼を置いたものであった<sup>(2)</sup>。今回は、ガンダーラとカピサの仏像との比較という視点での仏像を調査対象としている。

ポスト・クシャーン期の作例はラクナウの博物館やアッラーハーバードの博物館などに数多くの好例が所蔵されているが、今回は時間的な制約、マトゥラーへの移動の便などから、ラクナウを選択した。

しかし、調査にハプニングは付き物で、ポスト・クシャーン期の仏像調査を行う予定にしていたラクナウ博物館は、首相のラクナウ来訪に伴う特別行事の影響で閉館されており、翌日は休館日であったため目的を果たすことはできなかった。仏像を見ることはできなかったが、嬉しいハプニングもある。

(2) 『東西南北』2000、76-83頁。

宿泊先のホテルの中庭で地元有力者の御曹司の結婚式があり、バラモンが仕切る古式に則った婚礼の儀を取材することができた。仏伝（仏陀の生涯）図にあるように新郎新婦が手を取り合って火の周りを巡る場面を目撃して、感動だけでなく、幾種類も用意されたカレーや伝統的な料理を振る舞われ、文化の歴史を舌で感じることもできた。

## 1. マトゥラー調査の目的

マトゥラー美術は、一部にガンダーラからの影響がみられるものの、独自の美術を展開したといわれ、ガンダーラ仏にない特徴がいくつかある。頭光背には、縁に連続する弧線を描いて太陽の表現が見られるのをはじめ、巻貝様の髻、掌に千輻輪を表した施無畏印にあげた右手などがそれである。中でも、今回とくに注目したのは両脚の間の表現物である。ガンダーラの仏陀・菩薩像の脚間に同様のものが表現された作例はまったく見あたらない。しかし、調査を進めていく中で、マトゥラー仏の脚間に見られたこの特徴を有する作例がマトゥラー以外にも見つかった。それはカピサの中心都市址ベグラームの北4キロ、パンシール川南岸に位置する仏教寺院址ショトラクから出土した立像断片である。ベグラームを中心として散在するカピサ地方の仏跡からの出土品には基礎となったガンダーラ美術の伝統とともにガンダーラに見られなかった新しい様式が見られるが<sup>(3)</sup>、マトゥラーとの共通点もみられるわけである。そこで、今回の調査の目的の1つに、マトゥラー仏の脚間調査を加えたわけである。おおざっぱであるがこの3つの都の美術をいくつかの点で比較した。これにより、仏像が誕生した時代の美術を少しでも明らかにすることができると思う。さらに、ガンダーラ平原の北辺に連なる地域、すなわちスワート（マラカンド地区を含む）、ディール、ブネールなどの地方は「ガンダーラ」に含まれて語られることが多いが、様式、図像、顔貌、モチーフのいずれをとっても、ガンダーラ自体のものとは異なっており、区別して考えることが今後の研究に不可欠である。ガンダーラ美術の地方様式というだけでなく、その文化を担った民族や交易路の視点からも、これらの地方をガンダーラとは切り離して見る必要があると考え、ガンダーラとは別の地域として扱った。

(3) 『シルクロード博物館』99頁。



図1 - 1 仏陀立像、マホーリー出土



図1 - 2 同仏陀像脚間部分

## 2 . 仏陀・菩薩立像の脚間

仏陀や菩薩立像では、腰衣（ドーティー）の裾の下、両脚の間にわずかなスペースがある。概してこの空間には何も描かれていないが、一部にこの空間を表現に利用した作例がある。

### 2 - a マトゥラー

マトゥラーで制作されたと考えられているサールナート出土の仏陀立像は、脚間に仏陀の眷属であるライオン像を表している<sup>(4)</sup>。さらに左脚脇には蓮華と蕾、そしてサーンチー第1塔東門北柱のヤクシャ像右脇に描かれた果樹<sup>(5)</sup>と同じ樹木も描かれている。このような脚間という空間に何かを表現しているのはマトゥラー仏の特徴である。おそらくそれによってその立像である仏陀がなんたるかを説明していると考えられる。この立像は在銘によりカニシユカ王の3年に制作されたことがわかっている。また、カニシユカ王の2年に制作されたカウシャーンビーの仏陀像（「菩薩」銘）では、蓮華の束の様なものが脚間に表現されている（図1 - 2 参照）<sup>(6)</sup>。綱の先を結んだような房状

(4) サールナート博物館蔵、『世界美術大全集インド』図68

(5) 『世界美術大全集インド』挿図75

(6) アッラーハーバード博物館蔵、Czuma, p. 227, no. 3. これをターバンとする者もいる。Avatarana, p. 92



図2 仏陀立像、カンカーリティラー出土



図3 仏陀立像、パラトゥ門出土



図4 仏陀立像、ウスパル出土



図5 仏陀立像、ダウリ・ピャオー出土

のものの上に一群の蓮華の蕾を表し、さらにその最頂部に蓮華の花を開かせている。マホーリー出土の仏陀像にも同様のものが表されている(図1)<sup>7)</sup>。左脚脇にはやはり樹木(果樹?)が浮き彫りされている。おそらく同様の「蓮華束」を両脚間に表現した作例は、カニシュカ暦35年記銘のラクナウの仏陀

(7) 『世界美術大全集インド』挿図76



図6 仏陀立像断片、ショトラク出土



図7 焰肩仏立像、カピサ出土

立像(「菩薩」銘)<sup>(8)</sup>、同暦26年記銘のゴーヴィンドナガル出土の阿弥陀仏立像両足部分断片にもその一部がみられる<sup>(9)</sup>。左脚の側面には蓮華が浮き彫りされている。さらに同暦93年記銘の仏陀立像<sup>(10)</sup>、さらにはマトゥラー博物館に所蔵されているマトゥラー出土の仏陀立像のなかいくつかの作例(図2～5)をみることができる。ゴーヴィンドナガル出土のポスト・クシャーン期の仏陀立像にも同様のものがみられる<sup>(11)</sup>。

## 2 - b ガンダーラ

ガンダーラの仏陀像、菩薩像ともに両脚間の空間を厚く彫り残した作例はあるが、そこに何かを表そうとした作例は見あたらない。

## 2 - c カピサ

ショトラクから出土した仏陀または菩薩像の両足部分断片にマトゥラー仏のそれを想わせる「蓮華の蕾」表現がみられる(図6)<sup>(12)</sup>。また、写真がはっきりしないため断言することはできないが、同様の表現と思われるものが、鋸歯文の太陽型頭光背を着けた仏陀立像に見ることができる<sup>(13)</sup>。さらに出土

(8) マトゥラー博物館蔵、Czuma, p. 228, no. 11

(9) マトゥラー博物館蔵、『世界美術大全集インド』挿図80; Sharma, fig. 53

(10) Sharma, fig. 52

(11) 『世界美術大全集インド』挿図79

(12) Shotorak, pl. 130

地を特定できないものの、火焰身光背や、焰肩、蓮華状の千輻輪などの表現からカピサ地方で制作されたと考えられる焰肩仏立像では、マトゥラー仏の「房」部分に酷似したものがみられる(図7)<sup>(14)</sup>。その上半部は蓮華を浮彫にしているようにさえみえる。

## 2 - d ガンダーラ北接地域

ガンダーラの北側に連なるこれらの地域から出土した仏陀・菩薩立像では、ガンダーラと同じように、両脚間に何かを表現した作例は見あたらない。

## 3 . 光背の表現

光背は、仏陀、菩薩のみならず、インドラ(帝釈天)、ブラフマー(梵天)といった天部衆や天人・天女などの頭部の背後に表される円盤形のもので、大衆と聖的な存在とを区別する重要な表現であり、仏陀像、菩薩像には例外なくつけられている。しかし、地域や時代によって円盤上に異なった表現がみられる。



図8 仏陀坐像、アヒチャトラー出土

### 3 - a マトゥラー

マトゥラーでは、クシャーン時代に同定される仏陀像、菩薩像ともに、周縁を連続する弧(連弧文)で装飾した頭光背をもつ。

2世紀に同定されるマホーリー出土の仏陀坐像<sup>(15)</sup>、ガンダーラ仏の影響をみせるマトゥラー出土の仏陀立像<sup>(16)</sup>、またアヒチャトラー出土の弥勒菩薩立像(ニューデリー国立博物館蔵)<sup>(17)</sup>の頭光背はこの典型的な作例である。カニシュカ暦31年記銘の仏陀坐像と同32年記銘をもつアヒチャトラー出土の仏陀坐像(図8)<sup>(18)</sup>では、ヴァジュラパーニとインドラまたは

(13) Shotorak, pl. 64

(14) 「アフガニスタンそしてイラク」no. 12

(15) 「インド・マトゥラー彫刻展」no. 8仏坐像。

(16) 「インド・マトゥラー彫刻展」no. 9仏立像、『世界美術大全集インド』挿図77

(17) Gupta, no. 4.15, p. 35 弥勒菩薩立像。

奉献者を従えた三尊形式の坐像であるが、頭後背の周縁に連続する弧を描き、その内側に連珠帯で同心円を引いている。このような連弧の頭光背は太陽を表現したもので、仏陀と太陽との同一視とも関係している。同様の光背は3世紀後半とされる仏陀坐像<sup>(18)</sup>にもみられる。つまり、単独の仏陀像、菩薩像、三尊形式の仏陀坐像など、例外なくこの連弧を用いた光背を背負っている。

### 3 - b ガンダーラ

ガンダーラ仏の光背は概して無地の光背を背負っている。マルダーン出土の仏陀坐像<sup>(20)</sup>のように光背上に彩色で放光表現が施されていた可能性は否定しがたいが、すべての仏像の光背に施されていた確証はない。いずれにせよ、彫刻では残されていない。

鋸歯文の頭光背を背負う仏陀立像(ラホール博物館蔵)<sup>(21)</sup>、歯車に似た鋸歯文の頭光背をつける弥勒菩薩坐像<sup>(22)</sup>など、頭光背に装飾を施した作例はいくつか存在する<sup>(23)</sup>。しかし、その中には平たい丸顔の仏陀が多く、ガンダーラ自体の作例とは異なるように見える。この弥勒菩薩坐像も丸顔で、頭頂に結った8字形のクローピュス以外の髪は巻き毛である。偏袒右肩に着けた僧衣は薄手で、着衣法もガンダーラのものとは異なる。おそらく、北接地域あるいは時代の遅い作品と考えられる。また、観音菩薩と思われる花綱を手にしたクシャトリヤ形の菩薩(ラホール博物館蔵)<sup>(24)</sup>の頭光背には鋸歯文の替わりに蓮華の花弁を用いた蓮弁文と連珠文が表されている。シクリ出土であるが、このように花綱を手にした菩薩像は時代が少し下る。

タフテ・バーイ出土の弥勒菩薩坐像(大英博物館蔵)<sup>(25)</sup>は、鋸歯文の頭光背を背負う。この弥勒菩薩は偏袒右肩にしているが、ガンダーラ仏によく見られるような內衣と大衣の組み合わせにはなっておらず、マトゥラー仏のように、施無畏印をとる右手の平に千輻輪を描く。掌に千輻輪を描くのも、右手

(18) New Delhi 博物館蔵 (L55.25)、Czuma, no. 15 ; 「インド・マトゥラー彫刻展」no. 10参照。同様の頭光背をもつ作例は同展 no. 16などがある。

(19) 「インド・マトゥラー彫刻展」no. 16仏上半身像。胸板の広さから、おそらく坐像であったと思われる。

(20) 栗田 II, 192-193参照。

(21) Ingholt, no. 225

(22) ナトゥ上寺院址出土、Ingholt, no. 301

(23) 東京国立博物館蔵仏陀胸像も放光型の頭光背を着けるが、放光表現が5世紀頃の仏陀青銅像の身光背を想わせる矢印形になっており、時代が下ると考えられる。また、この仏陀像は施無畏印の右掌に円文によって千輻輪を表している。

(24) シクリ出土、Ingholt, no. 316参照。

(25) Zwalf, no. 66



の残るガンダーラ仏ではめずらしい。また、ガンダーラを中心部に位置するジャマルガリー出土の弥勒菩薩立像(大英博物館蔵)<sup>26)</sup>では、蓮弁状の鋸歯文とハート形を連ねた“植物文”を組み合わせている。別の弥勒菩薩立像(大英博物館蔵)では鋸歯文と波文の組み合わせになっている<sup>27)</sup>。このような作例はきわめて少なく、他地域からの影響と考えられる。

### 3 - c カピサ

ショトラクやパイターヴァ等、カピサ地方出土の仏像の光背には、周縁に鋸歯文が施されている。さらに、多くの仏像には身光背の表現もある。このような身光背は、年代がある程度確かな作例としてはカニシュカ1世発行の金貨に刻出された仏陀(銘はBODDO、図9)が挙げられるが、ガンダーラ仏、マトゥラー仏ともにみられず、タキシラの仏陀坐像(祠同 N18)、ガンダーラ後期の青銅仏<sup>28)</sup>やその後のパーミヤン壁画などにみられる表現である。

パイターヴァ出土の焰肩仏坐像(カーブル博物館蔵)<sup>29)</sup>は火焰身光のなかに鋸歯文の頭光背をもつ。ショトラク出土の燃燈仏断片(カーブル博物館蔵)<sup>30)</sup>にも同様に火焰身光背と鋸歯文頭光背の組み合わせがみられる。双神変図(国立ギメ東洋美術館蔵、2~3世紀)<sup>31)</sup>では、仏陀の頭光背の周縁には鋸歯文が施されている。このほかに、カピサ出土と思われる焰肩仏坐像でも、火焰文と鋸歯文を組み合わせた身光背の中に鋸歯文の頭光背を描いている<sup>32)</sup>。



図9 カニシュカ1世金貨

### 3 - d ガンダーラ北接地域

スワートはガンダーラの北側に隣接した地域であり、マトゥラーやカ

<sup>26)</sup> Zwalf, no. 50

<sup>27)</sup> Zwalf, no. 54, 58

<sup>28)</sup> 『世界美術大全集中央アジア』挿図96、サリ・バロール出土仏陀立像(ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館蔵、4~6世紀)

<sup>29)</sup> 『シルクロード博物館』図199、99頁。解説によれば、「ガンダーラ風の鋸歯文の頭光」とあるが、ガンダーラにはこのようなものは見られない。スワートの光背参照。

<sup>30)</sup> 『シルクロード博物館』図198、98頁。

<sup>31)</sup> 『世界美術大全集中央アジア』図152、116頁ほか参照。

<sup>32)</sup> 「アフガニスタン悠久の歴史展」no. 67

ピサ以上にガンダーラと密接な関係にあると考えられているが、ガンダーラ仏とは異なり、頭光背に文様を施した作例が多くみられ、その種類も多様である。

カルカッタの国立インド博物館に所蔵・展示されている一連のローリヤンタンガイ出土の仏・菩薩像は周縁に鋸歯文を施した頭光背をつける(図10)。同様の鋸歯文太陽型の頭光背は、スワート出土の弥勒菩薩立像(大英博物館蔵)<sup>33)</sup>などにみられる。



図10 仏陀立像(部分)、ローリヤンタンガイ出土

スワート川の西岸、ディール地方の仏教遺跡チャトパトからは鋸歯文の頭光背<sup>34)</sup>をはじめ、鋸歯文と花卉の折衷型頭光背<sup>35)</sup>、放光型<sup>36)</sup>、花卉型<sup>37)</sup>の頭光背をつけた仏陀像、菩薩像が出土している。この内のいく例かは、白毫をガンダーラのような疣状ではなく、円文で表している<sup>38)</sup>。

またガンダーラの北東部に接するバジャウル出土の仏陀像も、材質は灰色片岩の他、緑泥片岩や凍石など様々であるが、花卉型や放光型などの頭光背を背負った作例が多くみられる<sup>39)</sup>。ここでも、白毫を円文で表した作例が数点みられる<sup>40)</sup>。これらの作例の多くは禅定印を結ぶが、施無畏印の中に千輻輪を表したものも見られる<sup>41)</sup>。

#### 4. 三尊像形式

マトウラーの仏陀坐像には、ボストン美術館蔵の仏陀坐像、アヒチャットラー出土の仏陀坐像(図8)、カトラー出土の仏陀坐像など、尊像の両脇に神格または人物像を配した「三尊」形式のものがある<sup>42)</sup>。ボストンの坐像は1世紀後半～2世紀前半、アヒチャットラーの坐像は西暦110年(カニシュカ暦32

<sup>33)</sup> Zwalf, no. 55

<sup>34)</sup> Chatpat, 144

<sup>35)</sup> Chatpat, 51cp

<sup>36)</sup> Chatpat, 146, 147

<sup>37)</sup> Chatpat, 138-140, 142

<sup>38)</sup> Chatpat,

<sup>39)</sup> 栗田 II, 237, 242, 243, 245, 251, 252, 254-257, 259, 262, 264, 265, 267-270, 272-274参照

<sup>40)</sup> 栗田 II, 243, 245, 252, 259参照。

<sup>41)</sup> 栗田 II, 259, 269, 273参照。

年<sup>43)</sup>、カトラーの坐像(1世紀後半)<sup>44)</sup>、クリーヴランド美術館蔵の仏陀坐像(1世紀後半～2世紀前半)<sup>45)</sup>、ミュンヘン民族学博物館蔵仏陀坐像(1世紀後半～2世紀前半)<sup>46)</sup>、パーリケーラ出土仏陀坐像(西暦117年)<sup>47)</sup>など、三尊形式の作例のほとんどがとりわけクシャーン朝前半期のものである<sup>48)</sup>。そして、台座部が欠損しているミュンヘンのものと、台座部の損傷著しいボストンのものを除けば、仏陀はいずれも偏袒右肩で樹下の獅子座に結跏趺坐し、右手を施無畏印に挙げている。

サーリ・バロール出土の「三尊像」<sup>49)</sup>をはじめ、ガンダーラの三尊形式の坐像は<sup>50)</sup>、いくつかの点でマトゥラーのものとは異なる。主尊である仏陀はマンゴー樹の下、蓮華座に結跏趺坐し、転法輪印を結ぶ。おもに偏袒右肩であるが、通肩のものもある。左右の脇侍は、尊名は異なるが、いずれも菩薩形(釈迦菩薩、弥勒菩薩、観音菩薩など)である。大構図と呼ばれる一連の浮彫と分かちがたい作例も多い<sup>51)</sup>。このほか、「梵天勧請」(後出)と呼ばれるものも三尊像の一種である。ガンダーラの作例と思われるのは数例あり、いずれも通肩であるが、施無畏印をとるものと禅定印のものがある<sup>52)</sup>。髻が大きく、目を見開いた作例が多い。

カピサのショトラク出土の作例では、樹下に結跏趺坐した仏陀坐像を中心に2人の遊牧民王侯が合掌するものと、インド系の身なりをした2人の人物が合掌しているものなどがある<sup>53)</sup>。インド系の1人はターバンを被っている。仏陀はいずれも通肩で禅定印を結び、髻が大きい。これらの作例はスワートのプトカラ出土の作例を想わせる。

42) ボストン美術館蔵の仏陀坐像は Czuma, no. 12、アヒチャットラー出土の仏陀坐像(ニューデリー国立博物館蔵)は同書 no. 15および『世界美術大全集インド』図74、カトラーの仏陀坐像(マトゥラー博物館蔵)は『世界美術大全集中央インド』図66参照。

43) Czuma, no. 15参照。Czuma はカニシュカ暦元年 = 西暦78年と考えている。

44) 『世界美術大全集インド』図66および386頁解説参照。本書ではカニシュカ暦元年 = 西暦128年頃と考えている。

45) Czuma, no. 13

46) MU205. Czuma, no. 14参照。

47) Czuma, p. 228, no. 12

48) 上述の作例の他に、カニシュカ暦4年記銘の坐像(マトゥラー出土、キンベル美術館蔵、『世界美術大全集インド』図67) 同暦31年記銘の坐像(個人蔵、Czuma, p. 227, no. 9) などがある。

49) マルトー・コレクション、「5年」( = 西暦182年としている) 記銘、Czuma, no. 109、およびベシャーワル博物館蔵 (no. 1527) 、Ingholt, no. 253参照。

50) 上述の2例以外の作例は、Ingolt, no. 252, 254, 258, 259, 261、栗田 I, no. 410など参照。

51) 「大構図」は長年「シュラーヴァステীরの奇蹟」場面と考えられてきたものである。

52) 施無畏印は栗田 I, no. 261, 265, 267、禅定印は no. 262, 266参照。

53) Shotorak, fig. no. 56, 57参照。

北接地域にも三尊形式の作例がある。樹下に結跏趺坐した仏陀坐像を中心にインドラ（帝釈天）とブラフマー（梵天）を配したいわゆる「梵天勧請」図がそれである。作例の多くが緑泥片岩製で、ガンダーラ自体ではなくスワートを中心とする北接地域出土のものであると考えられる<sup>54)</sup>。仏陀には偏袒右肩で禅定印を結ぶものと通肩で施無畏印をとるもの、通肩で禅定印を結ぶものがある<sup>55)</sup>。ガンダーラと同じく、仏陀像は髻が大きく、目を見開いている。禅定印のものには梵天勧請と考え得るものもあるが、施無畏印のものは三尊像である可能性が高い。

## 5. 奉献者像

仏陀や、弥勒菩薩像の傍らには、教団に多額の寄付をおこなったか仏伝図などの浮彫を奉献した世俗の者たちが多くみられる。彼らは合掌したり、蓮華の花束を手にして描かれていることが多く、顔貌や服装に多少の違いこそあれ、このような姿はいずれの地域にも共通してみられる。興味を引かれたのは、胸前まであげた右手に带状の布を握り、反対側の端を腰前に差し出した左手に持つか掛けるかした人物像である。このような人物像はマトゥラーとカピサにみられる。



図11 リンガ礼拝図（部分）、マトゥラー出土



図12 仏陀誕生図（部分）、カピサ出土

<sup>54)</sup> 栗田 I, no. 245-247, 253-260, 263, 264

<sup>55)</sup> 通肩・禅定印は栗田 I, no. 245-247、通肩・施無畏印は同書 no. 254-259, 263, 264、通肩・禅定印は同書 no. 253, 260参照。

マトゥラー博物館蔵のリング崇拜図では、三叉状の肩掛けを着けた奉獻者がこの姿をとる(図11)<sup>56)</sup>。異教の礼拝図であるが、このリングはもともと仏陀像であったものが後にリングへと彫り直されたもので<sup>57)</sup>、比較対象となりうる。

カピサでは、上述の焰肩仏立像の下層部(図12)や文化財難民の誕生図<sup>58)</sup>などにみられる。

## 6. 千輻輪

アヒチャットラー出土の仏陀坐像、同弥勒菩薩立像、カトラー出土の仏陀坐像をはじめ<sup>59)</sup>、カニシュカ暦4年在銘の仏陀坐像<sup>60)</sup>、ボストン美術館蔵の仏陀坐像<sup>61)</sup>、マトゥラー出土の仏陀立像(マトゥラー博物館蔵)<sup>62)</sup>、クシャン朝後期に属すマトゥラー出土の仏陀上半身像(同館蔵)<sup>63)</sup>、サハート・マハート出土の仏陀坐像(ラクナウ州立博物館蔵)<sup>64)</sup>、さらにマトゥラー出土の菩薩半跏思惟像(クロノス・コレクション)<sup>65)</sup>など、マトゥラー仏には施無畏印に挙げた右掌に大きな車輪の形をした千輻輪が刻まれた作例が数多く存在している。千輻輪の大きさは時代とともに小さくなっていったようである。

右手が現存するガンダーラの仏陀像・菩薩像はあまり多くないが、現存する作例で見ると、鋸齒文頭光背をもつ弥勒菩薩坐像(大英博物館蔵)<sup>66)</sup>、二重円頭光背の弥勒菩薩坐像(ラホール博物館蔵)<sup>67)</sup>のほか、シクリ・ストゥーパに描かれた一連の仏伝図浮彫に登場する仏陀像<sup>68)</sup>に小さな円盤形で表された“千輻輪”がみられる。クシャーン朝後期のマトゥラー仏のものよりも小

<sup>56)</sup> 『世界美術大全集インド』挿図93;「インド・マトゥラー彫刻展」no. 26参照。

<sup>57)</sup> バウチェ氏(和光大学イメージ文化学科教授)による指摘。リングの正面中央に仏陀の臍の跡がみえる。

<sup>58)</sup> 「アフガニスタンそしてイラク」no. 14

<sup>59)</sup> アヒチャットラー出土の仏陀坐像は Czuma, no. 15または『世界美術大全集インド』図74、同弥勒菩薩立像は『世界美術大全集インド』図72、カトラーの仏陀坐像は『世界美術大全集インド』図66参照。

<sup>60)</sup> 『世界美術大全集インド』図67

<sup>61)</sup> Czuma, no. 12参照。

<sup>62)</sup> 「インド・マトゥラー彫刻展」no. 9参照。

<sup>63)</sup> 「インド・マトゥラー彫刻展」no. 16参照。頭光背は連弧太陽型に連珠帯。

<sup>64)</sup> 「インド・マトゥラー彫刻展」no. 17または『世界美術大全集インド』図75参照。頭光背は、蓮華型。

<sup>65)</sup> 『世界美術大全集インド』図73参照。頭光背は蓮華型。

<sup>66)</sup> Zwalf, no. 66

<sup>67)</sup> Ingholt, no. 299

<sup>68)</sup> Ingholt, nos. 7, 60, 70, 126, 136.

さい。

## 7. まとめ

クシャーン朝の3つの都の仏教美術はそれぞれに一見してそれとわかる独自の表現を發展させてきたが、これまでみてきたように、それぞれに共通点も多く見られた。しかし、仏教文化の、そして政治の中心地であったと考えられるガンダーラをはさんで、マトゥラーとカピサの仏陀や菩薩立像の脚間に見られる表現がガンダーラ仏には見られなかったり、頭光背の表現も、ガンダーラの年代の下った一部作例にしか見られない「太陽型」表現がマトゥラー、カピサだけでなく、スワートやディール、バジャウルといった北接地域に数多く見られる。これらことはいったい何を意味しているのであろうか。

クシャーン時代の仏陀像として重要なものに、この王朝でもっとも有名なカニシュカ1世の発行した金貨に刻出された仏陀像(図9)がある。直径わずか2センチほどの小さな空間に描かれた仏陀像であるが、重要な資料であり情報源である。正面を向いて立つ仏陀は目を見開き、髻が大きい。この顔貌は一連のガンダーラの「初期仏」を想わせる。さらに左手の衣の取り方がペシャーワル博物館蔵の仏陀立像<sup>69)</sup>やベルリンのインド美術館蔵の作例と同じであり、髻の表現はペシャーワルのものに酷似し、右掌の千輻輪はベルリンのものにもみられる。耳の形はこの2例とは異なり、左手を降ろして衣をとる大英博物館蔵の作例<sup>70)</sup>やガイ・コレクションのもの<sup>71)</sup>に似る。しかし、2重円の頭光背は時代が下ったガンダーラの一部<sup>72)</sup>にしかみられず、むしろマトゥラーの連弧、カピサや北接地域の鋸歯文による太陽型の光背を想わせる。身光背はカピサの作例にしかみられない。また、左脚にわずかに重心をかけた支脚遊脚(コントラポス)を表現しようとしているのであろうが、ほとんど両足を突っ張った立ち方は、マトゥラー仏やカピサ仏と共通する。しかしガンダーラの仏陀像や菩薩像が例外なく明確な支脚遊脚に表現されていることや、マトゥラーでは、クシャーン朝に先行するパールカムのヤクシャ像がはっきりとした支脚遊脚になっている点も考慮すれば、マトゥラー仏が脚を突っ張って立つのはカニシュカ王像やカニシュカ金貨の仏陀像の影響によるのではないだろうか。

<sup>69)</sup> 「ガンダーラ彫刻展」no. 1

<sup>70)</sup> Zwalf, no. 2

<sup>71)</sup> 現在の所蔵は不明。Ingholt, no. 217参照。

<sup>72)</sup> 上述の「ガンダーラの光背」参照。

これらの点からにわかに結論を導き出すことはできないが、仏陀が人の姿で表されてから少し年代の下った仏陀像を表したカニシュカ金貨の時代にマトゥラーヤカピサの造像の時代が重なるように感じられる。カピサのショトラクから出土した「カーシャパ兄弟の仏礼拝」図の仏陀がガンダーラの顔貌と二重円の光背をもつ<sup>(73)</sup>。そしてこの時代に、ガンダーラでも二重円の頭光背や千輻輪を表した仏陀像が制作されたと考えられる。

#### 主な参考文献

- 『世界美術大全集東洋編15 中央アジア』小学館 1999年  
『世界美術大全集東洋編13 インド(1)』小学館 2000年  
『世界の博物館19 シルクロード博物館』講談社 1979年  
栗田功『ガンダーラ美術』2巻、二玄社 1990年  
図録「インド・マトゥラー彫刻展」「パキスタン・ガンダーラ彫刻展」東京国立博物館 2002年  
図録「流出文化財を守れ アフガニスタンそしてイラク」日本橋三越本展ほか、2003年  
Ackerman H. C. *Narrative stone reliefs from Gandhāra in the Victoria and Albert Museum in London. Catalogue and attempt at a stylistic history.* Rome 1975 (= IsMEO. Reports and Memoirs, vol. XVII).  
Stanislaw J. Czuma, *Kushan Sculpture: Images from Early India*, Cleveland 1985.  
Gupta, S.P. *Kushana Sculptures from Sanghol*, New Delhi 1985.  
Ingholt H. - Lyons I., *Gandharan art in Pakistan*. New York 1957.  
Meunie, J. Shotorak, *MDAFA* tome X, Paris 1942.  
Sharma, R.C. *The splendour of Mathura*, New Delhi 1994.  
Verardi, G. Avatarana, "A note on the Bodhisattva image dated in the third year of Kaniska in the Sarnath Museum", *East and West*, N.S., Vol. 35-Nos. 1-3 (Sep. 1985), pp. 67-102.  
Zwalf W. *A catalogue of the Gandhāra sculpture in the British Museum*. Vol. I: Text. Vol. II: Plates. London 1996.

(73) 「アフガニスタンそしてイラク」no.9